

〔学術論文〕

日本語教育での接頭辞「お」の付く語 三種の分類提唱について

——「おかばん」類、「お菓子」類、「おやつ」類

Three categories of the prefix “お” in Japanese language education

村田 志保
Shiho Murata

要旨 接頭辞「お」は、日本語の敬語体系に属しており、尊敬語、謙譲語、美化語に関係している。しかし、接頭辞「お」の付いた形（「おかばん」「お菓子」「おやつ」など）自体は、尊敬語、謙譲語、美化語ともに変化はなく、みな同じ形である。そのため、日本語教育において、接頭辞「お」を扱う場合、同じ形をどう教えるかが、問題となってくる。

本稿では、日本語教育において、接頭辞「お」をどのように扱うとより学習しやすくなるのかを踏まえながら、接頭辞「お」の持つ用法分類を検討した。

先行研究より接頭辞「お」は、一般的な敬語分類において、「尊敬語」「謙譲語」「美化語」に関連していることがわかっているが、実際の現場においては、「美化語」ではなく、「丁寧語」という解釈もある。

このような扱いについて、敬語の5分類にこだわらず、接頭辞「お」の用法として学習者に説明するという立場から、「おかばん」などの語を代表とする〔敬意の「お」〕、「お菓子」などの語を代表とする〔丁寧の「お」〕、「おやつ」などの語を代表とする〔名詞化した「お」〕という三つの用法に分類するという仮説を提案し、それらについての検証方法を考察した。

キーワード：日本語教育 接頭辞「お」 おかばん お菓子 おやつ

はじめにー 日本語学習者が抱える接頭辞「お」の問題点

例えば、日本語を学習する外国人学習者が、普通体を使用するような関係である友達に、三角に握ってのりをまいたごはんを食べようと言うとする。その三角に握ってのりをまいたごはんは、おにぎりなので、「おにぎりを食べよう。」と言いたい。「おにぎり」は、「お」が付いている形であ

る。普通体で話す相手なので、「お」という敬語は必要ないと判断し「お」を外して、「にぎり食べよう。」と言おうと考える。日本人には、「にぎり」とは、寿司のにぎりだと捉えられて、寿司屋へ行くことになる。「おにぎり」のつもりで言ったにもかかわらず、お寿司の「にぎり」と勘違いされるおそれがある。

レストランの予約を取るような電話でのやりとりで、「失礼ですが、お名前は？」と聞かれ、「私のお名前は・・・」というよりも、「私の名前は・・・」と答えるであろう。相手の名前は「お名前」というが、自分の名前が「お名前」になると、違和感を生ずる。

このように、文脈によって「お」の付いた形であるのか、「お」の付かない形であるのかという判断が必要な場合や、また「私のお財布」「あなたのお財布」「あのお店に売っているお財布」というように語形が同じで、尊敬語であるのか謙讓語であるのか丁寧語であるのか美化語であるのかという判断が不可能な場合には、名詞に「お」の付く語は厄介なものになる。日本語教育において、学習者に理解しやすい接頭辞「お」となるような提案を論じていきたい。

本稿においては、接頭辞「お」の先行研究、さらに日本語教育における接頭辞「お」の扱い、接頭辞「お」の用法について論ずる。

この発展として、『日本語教育基本語彙』(1997)からの接頭辞「お」の付きうる語の採取、接頭辞「お」の用法による分類、接頭辞「お」の付きうる語の語種による分類は、別稿を準備中である。

1. 先行研究

1-1 文化審議会答申「敬語の指針」(平成19年2月2日)

平成19年2月2日に文化審議会国語分科会より「敬語の指針」が答申された。この答申では、国語分科会の前身である国語審議会において「これからの敬語」(昭和27年4月)が建議され、「現代社会における敬意表現」(平成12年12月)が答申されて以降、今まで検討されてこなかった人間関係に対する配慮が考慮されたものとなっている。今後、日本語教育においても、「敬語の指針」(2007)に基づいた敬語の分類が主軸となっていくであろう。

内容の変化として、「敬語の指針」(2007)によると、敬語を3分類(尊敬語、謙讓語、丁寧語)から5分類へ移行させたものとなっている。その敬語の5分類とは、菊地(1997)において提案された5分類に近い内容である。

3分類において謙讓語であったものを、5分類では、謙讓語Ⅰ、準敬語であった丁寧語と謙讓語の一部を謙讓語Ⅱとし、準敬語であった美化語に1分類を与えている。表にまとめると、以下のようなになる。

従来の分類	5分類
尊敬語	尊敬語「いらっしゃる・おっしゃる型」
謙讓語	謙讓語Ⅰ「何う・申し上げる型」
丁寧語(準敬語)	謙讓語Ⅱ「参る・申す型」

丁寧語	丁寧語「です・ます型」
美化語(準敬語)	美化語「お酒・お茶型」

内容としては、従来の分類での準敬語の「丁寧語」としていた分類を、「敬語の指針」(2007)では[謙讓語Ⅱ「参る・申す型」]と位置づけ、「自分側の物事を申し述べる」と説明している。ここが大きく異なる点である。また敬意を示す方向を、ここでは「立てる」という表現を使用している。

尊敬語

[尊敬語「いらっしゃる・おっしゃる型」]は、聞き手又は第三者の行為、ものごと・状態などについてその人物を立てて述べることでありとしている。「人物を立てる」とは、尊敬語を使用することによって、その人物を言葉の上で高く位置づける。

「先生が来る。」 — ①

「先生がいらっしゃる。」 — ②

立てる相手である「先生」の行為を、「いらっしゃる」によって表す。①の文の「来る」というよりも、②の文「いらっしゃる」のほうが、立てることを表している。立てる人物のものごと・状態とは、「先生のお名前」「先生はお忙しい」というように、名詞と動詞に「お」を付けることによって、立てることを表すことができる。

尊敬語の形には、「行く・来る」を言い換える「いらっしゃる」、「言う」を言い換える「おっしゃる」、「する」を言い換える「なさる」、「食べる」「飲む」を言い換える「召し上がる」、「くれる」を言い換える「下さる」、「来る」を言い換える「見える」という特定形²と、「お(ご) ～になる」「～(ら)れる」「～なさる」「ご～なさる」「お(ご) ～だ」「お(ご) ～くださる」という「～」に動詞の連用形を入れる一般形³がある。

謙讓語

[謙讓語Ⅰ「何う・申し上げる型」]は、自分側から聞き手又は第三者に向かう行為、ものごとについてその向かう先の人物を立てて述べることでありとしている。立てる人に向かう行為とは、

¹ 「敬語の指針」(2007)では、「立てる」とは「敬意を示す方向」を表す。

² 「行く」に対する「いらっしゃる」「参る」というように、特定の語で言い換えられ、他に転用できない形を指す。いわゆる尊敬動詞、謙讓動詞の類である。

³ 「読む」の尊敬語は、「お読みになる。」で、謙讓語は、「お読みする。」というように、いろいろな語に適用する形を指す。

「先生にお荷物を届ける。」 — ③

「先生にお荷物をお届けする。」 — ④

立てる相手である「先生」の行為を、「お届けする」によって表す。③の文の「届ける」というよりも、④の文「お届けする」のほうが、立てることを表している。

また③、④の文において、「お荷物」というように、「お荷物」と「お」をつけることによって、謙譲語の文においても、「お荷物」の所有者である「先生」を立てることができる。

謙譲語Ⅰの形は、「訪ねる・尋ねる・聞く」を言い換える「伺う」、「言う」を言い換える「申し上げる」、「知る」を言い換える「存じ上げる」、「上げる」を言い換える「差し上げる」、「もらう」を言い換える「頂く」、「会う」を言い換える「お目に掛かる」、「見せる」を言い換える「お目に掛ける」、「御覧に入れる」、「見る」を言い換える「拝見する」、「借りる」を言い換える「拝借する」という特定形、「お(ご)～する」、「お(ご)～申し上げる」、「～ていただく」、「お(ご)～いただく」という「～」に動詞の連用形を入れる一般形がある。

【謙譲語Ⅱ(丁重語)「参る・申す型」】は、聞き手の行為・ものごとなどを話や文章の相手に対して、丁重に述べることを表す。自分側の行為とは、

「率直に言いますと・・・」 —⑤

「率直に申しますと・・・」 —⑥

⑤の文では話し手、つまり自分が「言う」という行為を言い述べることができる。⑥の文では「申す」という謙譲語を用いて、話し手から聞き手に丁重さを表すことができる。ものごとについては、自分の著書を表す「拙著」や自分が属す会社を「小社」などと言うことによって、聞き手に丁重さを伝える。

謙譲語Ⅰと謙譲語Ⅱを見てきたが、この両方の性質を兼ね備えた謙譲語「お(ご)～いたす」がある。自分側から聞き手又は第三者に向かう行為について、その向かう先の人物を立てるとともに話や文章の相手に対して丁重に述べる、という働きをもつ。

「駅で先生をお待ちいたします。」 —⑦

⑦の文の場合、もとの形は「お～します」という謙譲語Ⅰであるが、この「します」を謙譲語Ⅱ「いたす」に変えた形となっている。謙譲語Ⅱの形は、「行く」「来る」を言い換える「参る」、「言う」を言い換える「申す」、「する」を言い換える「いたす」、「いる」を言い換える「おる」、「知る」「思う」を言い換える「存じる」という特定形、「～いたす」という「～」に動詞の連用形を入れる一般形がある。

丁寧語

〔丁寧語「です・ます型」〕とは、話や文章の聞き手や読み手に対して丁寧に述べることを表す。

「次は来月10日だ。」—⑧

「次は来月10日です。」—⑨

⑧の文は、文末が、「だ」となっている。⑧の文よりも、⑨の文の「です」という文体のほうが、聞き手に丁寧さを伝えることができる。この丁寧語は、聞き手に丁寧さを表すことができる。

美化語

〔美化語「お酒・お料理型」〕は、ものごとを美化して述べることを表す。

「お酒は百薬の長なんだよ。」—⑩

⑩の文は丁寧体ではなくて、普通体となっているが、「酒」に「お」の付いた形「お酒」となっている。この「お酒」は、尊敬語のような名詞に「お」を付けて聞き手又は第三者を立てるという働きを持たず、謙讓語Ⅰのように立てるべき人物への「お酒」という働きも持たず、いかなる場合にでも付けることができる「お」である。

しかし、「?おすり鉢」のように、一般的には「お」を付けない語もある。また「御祝儀」のように、「御」をつける語もある。

以上先行研究より、接頭辞「お」の付く語は、尊敬語、謙讓語、美化語に関係していることがわかった。しかしながら、「おかばん」と言われても、尊敬語であるか、謙讓語であるか、美化語であるかの見当がつかない。そのため、実際の運用において日本語学習者には、困難を感じる側面が残る。本稿では、5分類という立場をとらず、高める相手への敬意や丁寧さといった観点より、考えていきたい。

1-2 日本語教育における接頭辞「お」の扱い

先行研究より、接頭辞「お」は、「お～になる」「お～くださる」の尊敬語、「お～する」「お～いたします」の謙讓語、また立てる人のものに「お」を付ける尊敬語（「おかばん」など）、美化語の「お」という3つの要素をもつ接頭辞であるということがわかっている。

学習者に接頭辞「お」を提示する場合、文の形で判断できる「お」は問題ないが、「おかばんをお持ちする。」という文の「おかばん」が尊敬語という理解はとても難しいであろう。日本語教育では接頭辞「お」をどのように扱っているのだろうか。

日本語教育において、教師向けの文法参考書では接頭辞「お」そのものを説明しているものは数少ない。そのような状況において、『独りで学べる日本語文法』(P158～159) (東中川かほる・東雲裕子著 2003) では、接頭辞「お」について詳細に説明されていたため、引用する。

「先生のお話がうかがいたいんですが・・・。」の場合は、尊敬語ですが、「先生にお話があるんですが・・・。」という場合は謙譲語になります。「お返事、お電話」についても同じです。

というように、「お話」「お返事」「お電話」が、謙譲語の文脈であっても、「先生の話すお話」であるために尊敬を示すとしている。

「お話があるんですが」という文では、話しての「お話」は話し手から先生への話であるため、謙譲的表現という捉え方である。

上述の「お」は、人についての表現であるのに対し、お味噌汁などの「女房ことば」は物事についての「お」の付く語であり、丁寧語であると説明されている。

普通より丁寧に表現し、自分の言葉の品位を高めるために用いられます。宮中の女房詞(ことば)から始まったとされ、主に女性が使うことが多いようですが、改まった席では、男性も使います。

と述べられている。先行研究では、美化語に関すると言われていたが、ここでは、丁寧語という説明である。

日本語教育で広く使用される教材は、『みんなの日本語』(2005)であろう。そこでの接頭辞「お」の付く語の扱いは、第1課(P11)で、「失礼ですが、お名前は?」「イーです。」、第3課(P22)で「お手洗いはどこですか。」「お国はどちらですか。」と質疑応答文に「お」の付いた語がでてきている。第1課では、教室の指示ことばで「名前」がでてきているため、「お」がある語とない語の説明が、簡単に必要となる。

「お土産」「お酒」「お元気」「お仕事」などの「お」の付いた語がほぼ各課で取り上げられ、第7課(P57)では、「お上がりください。」のような動詞に「お」の付く語が、会話で取り上げられる。

「お」が文の形として取り上げられるのは、第49課で「お～になる」の尊敬語、第50課で「お～する」の謙譲語となっており、ともに動詞の連用形に「お」をつけるという説明である。しかし、「お」+名詞を取り上げて、説明する項は見当たらない。

以上日本語教育において接頭辞「お」の扱いを見てきた。東中川(2003)は、「敬語の指針」(2007)とは少々異なる説明で、美化語で説明されていた語を、丁寧語として扱っている。美化語として学習者に捉えさせるのは難しいので、丁寧語として教えたほうがいい、という提案であろう。いずれにせよ、「お」の付く語は、形の上でのそれぞれの区別はない。

また、『みんなの日本語』(2005)では、接頭辞「お」の付く語がかなり早い段階で導入されているが、「お」の特別な説明はない。

接頭辞「お」の付く語は、やはりあいまいに見過ごされる点が多々あるかと思われる。そのためにも、接頭辞「お」の付く語に関する分類の考案を本稿で取り扱っていきたい。

2 接頭辞「お」に関する用法について

2-1 接頭辞「お」の用法仮説

「敬語の指針」(2007)によると、「接頭辞「お」は、尊敬語、謙讓語Ⅰ、美化語のそれぞれに相当する」とされている。また、東中川(2003)では、接頭辞「お」に関して、尊敬語、謙讓語、丁寧語の用法を持つことを示唆している。

では、日本語教育において、どのように説明していくべきであるか。接頭辞「お」の付く語は、三種にわたる敬語の分類から考察する場合、どの語についても形に変化がなく、区別しにくい。そのため、接頭辞「お」の持つ根本的な機能の面より、用法を考えていくこととする。

「おかばん」のような語は、「わたしのおかばん」というと、普通ではなく、「先生のおかばん」というように、「先生」のものに「お」をつけることができる。尊敬的な意を含む「お」となる。

また、「わたしが社長のおかばんをお持ちします。」といった謙讓語の文脈において使用する「お」は、謙讓語の文脈であるのに、謙讓的な意を含む「お」ではなく、敬意を表す人のものであるから、尊敬の意を含む「お」である。謙讓の意ではない。

このような点を、日本語教育で教えるにはとても難しいため、本稿では[敬意を表す「お」]として、ひとまとまりに扱うこととしたい。

「おかし」「お酒」のような語は、「わたしのおかし」「先生のおかし」というように、話し手に関するものにも、そして敬意を表す人に関するものにも、「お」をつけて「おかし」といえるであろう。敬意を表す人に関するものにも、「お」をつけられるため、美化語の「お」ではなく、これを[丁寧の「お」]とする。

「おにぎり」「おやつ」といった「お」の付いた形で名詞化した語に関しては、文法の問題から外れるため、説明されず、そのまま導入されることが多い。これらを[名詞化した「お」]とする。その三つの用法を仮説とし、以下に立ててみる。

敬意を表す「お」

丁寧を表す「お」

名詞化した「お」

この三つの用法が、適切かどうかを考察するため、以下に検証を行っていく。

2-2 用法による検証 敬意を表す「お」

「わたしのかばん」「あなたのおかばん」というように、敬意を表す人のもに「お」を付ける表現を「敬意を表す「お」」として、検証していく。

「あなたのおかばん」の場合、立てるべき相手が、「あなた」であって、その「あなたのかばん」であるため、「お」をつけて「あなたのおかばん」という。この場合に使用される実際、このような「あなたのおかばん」が使用された例を挙げる。

「それから御朝食は、旦那？ はいはい、畏りました。は、どうぞそちらへ。^{コンコード}和合の間へ御案内！
お客さまのお^{かばん}鞆と熱いお湯を^{コンコード}和合の間へな。お客さまのお長靴は^{コンコード}和合の間でお脱がせ申すんだぞ。(上等の石炭で火が燃やしてございますよ、旦那。)床屋さんを^{コンコード}和合の間へ呼んで来ておあげなさい。さあさあ、^{コンコード}和合の間の御用をさつさとするんだよ！」

『二都物語 上巻』

(チャールズ・ディッケンズ 佐々木直次郎訳 1967 岩波文庫)

下線を引いた、「おかばん」であるが、このときの「おかばん」は、「お客さまのおかばん」で、私のかばんではない。「お客様のかばん」ということから、話し手から、立てるべき「お客さん」への敬意を表す「お」と考えられる。

最近の使用状況では、ANAのホームページより、「おカバン」を見つけることができた。

「フランクフルト空港以外よりご出発されるお客様は、ご出発当日18時まで以上に上記預かり所までお越しください。フランクフルト空港でのおカバンのお受け取りが必要となりますのでご注意ください。」

<http://www.anaskyweb.com/de/j/travelservice/departure/service/gmsky/> 2007/12/12

ここでの「おカバン」は、所有者は「おカバン」の前に明示されていない。しかし、前述の「お客様」が、「フランクフルト空港～」にかかっているため、「お客様のおカバン」であるということがわかる。

また、次に示す写真では、鞆を引き取る人であるため、この場合も中部国際空港を利



中部国際空港のカバン引取りのターンテーブルにて(2007/12/22)

用する「お客様」になる。その「お客様」の鞆であるため、「お鞆」と「お」の付いた形となる。

また、「私のおかばん」「父のおかばん」「夫のおかばん」「息子のおかばん」はそれぞれ尊敬語を使用できない所有者であるため、むしろ「お」を取った形のほうが適している。

話し手からみた、敬意を表す人を「先生」とし、次の四文から考える。

- | | | | | |
|--------|-------|-------|-----------------|---|
| Aが | (Bの) | Cを | 持つ | |
| [1]先生が | (先生の) | おかばんを | <u>お持ち</u> になる。 | |
| [2]先生が | (私の) | おかばんを | <u>お持ち</u> になる。 | ? |
| [3]私が | (先生の) | おかばんを | <u>お持ち</u> する。 | |
| [4]私が | (私の) | おかばんを | <u>持つ</u> 。 | ? |

[1] 話し手の立てるべき相手が先生であるため、先生の行為を「お～になる」という尊敬語を使用する。所有者が敬意を表す「先生」の「かばん」なので、「お」を付けて「おかばん」とする。

では、「おかばん」の「お」を取った形の「かばん」は言えるであろうか。「お」を取った形、「かばん」にして、言い換えてみる。

先生が (先生の) かばんを お持ちになる。

「先生」が所有する「かばん」には、「お」を付けて、「おかばん」としたほうがよいだろう。

[2] 話し手が立てるべき相手は「先生」であるため、先生の行為を「お～になる」という尊敬語を使用する。このとき、話し手の敬意を表す「先生」が持つ「かばん」は、「話し手のかばん」である。「持つ」行為によって、影響を及ぼされる人は、話し手つまり私である。

「お」を付けない形の「かばん」で、文を言い換えてみる。

先生が (私の) かばんを お持ちになる。

ここでは、「お～になる」という尊敬語で、敬意を表す「先生」の「持つ」という行為だが、「持つ」行為によって影響を及ぼされるのは、「私のかばん」である。従って「お」の付かない形、「かばん」のほうがよい。

[3] 「お～する」という謙讓表現で低められるのは、動作主である「私」で、影響を及ぼされる相手とは、「かばん」の所有者である「先生」になる。

では、「おかばん」の「お」を取った形「かばん」は言えるのであろうか。「お」を取った形、「かばん」にして、言いかえてみる。

私が (先生の) かばんを お持ちする。

「持つ」という行為によって影響を及ぼされる人は、「かばん」の持ち主である先生である。この場合は、「かばん」よりは「お」を付けた形の「おかばん」のほうがよい。

[4] この文では、立てるべき相手は、存在しない。では、「おかばん」の「お」を取った形「かばん」は言えるのであろうか。「お」を取った形、「かばん」にして、言い換えてみる。

私が (私の) かばんを 持つ。

「かばん」の所有者は、話し手自身を表す「私」である。「持つ」という行為によって持ち上げられる物は、「私のかばん」である。「持つ」という行為によって影響を及ぼされる人は、話し手自身である「私」である。この場合は、「お」をつけない形の「かばん」のほうがよい。

「お」をつけた場合には、その「お」は、話し手から聞き手に対する敬意を表すことができる「お」であるといえる。

「お」の付く語は尊敬表現の文脈にも、謙譲表現の文脈にも表れることができる「お」である。どちらも敬意を表す聞き手または話題の人物に所属する物、いわゆる所有物である名詞に付く「お」である。

ただ、尊敬表現の場合は、聞き手または話題の人物が動作主となり、その動作や物などに「お」を付けていうが、謙譲表現の場合は、動作主は低める話し手側で、動作主の動作が敬意を示す人に影響を及ぼす、敬意を示す方向にある聞き手または話題の人物の手に渡る、もしくは関係する物に付く「お」である。このため、謙譲表現の場合に表れる「お」は、話し手自身に関係する「お」ではなく、聞き手または話題の人物に関与する物であるために、「お」を付ける。

①から④を整理してみると、以下のようになる。

[1] Aは話し手が敬意を表す(立てるべき)人

B ((C)の関与者)は敬意を表す(立てるべき)人

行為者は、「お～になる」の尊敬語であるため敬意を表す人

[2] Aは話し手が敬意を表す(立てるべき)人

B ((C)の関与者)は敬意を表さなくてもよい(立てる必要のない)人(話し手自身)

行為者は、「お～になる」の尊敬語であるため敬意を表す人

[3] Aは話し手が敬意を表さなくてもよい(立てる必要のない)人(話し手自身)

B((C)の関与者)は敬意を表す(立てるべき)人

行為者は、「お～する」の謙讓語であるため話し手

[4] Aは話し手が敬意を表さなくてもよい(立てる必要のない)人(話し手自身)

B((C)の関与者)は敬意を表さなくてもよい(立てる必要のない)人(話し手自身)

行為者は普通体(この状況で謙讓語を使用する可能性は少ない。)であるため話し手

[2][4]は、「お」の付かない形、[1][3]は、「お」の付く形でそれぞれ言い表されることができ
る場合に、[敬意の「お」]であると言えるであろう。

2-3 用法による検証 丁寧を表す「お」の付く語

丁寧を表す「お」であるが、「敬語の指針」(2007)などでは、素材表現を美化する用法であると記載されている。素材表現を美化するということで、話し手側から聞き手、いわゆる対者を意識して話すときに用いられる語ということになる。

過去に、敬意の「お」でない聞き手または話題の人物に向ける丁寧を表す「お」が実際どのような状況で現れるのか、例を次に提示する。

何を飲むかときかれたので、豹一は珈琲だと答えた。多鶴子はボーイを呼んで、

「お珈琲にお菓子、……それから、私はクリーム、……クリームはなに……？」

「ヴァニラだけでございます。」

ボーイが言った。

『織田作之助全集 2』(織田作之助 1970 講談社)

登場人物である「多鶴子」が、喫茶店で、ボーイに注文をする場面である。このとき話し手が注文する物に、「お」をつけていることから、[敬意を表す「お」]ではなく、聞き手に対する丁寧さを表す「お」ということがわかる。

現在の使用例を、インターネットにて採取した。

「お菓子百科クラブ お菓子百科事典 お菓子づくりの基礎辞典」

<http://web.okashi-web.com> 2009/09/23

「クラブ」というゆえに、聞き手への呼びかけだけではなく、話し手も所属することから、敬意の「お」ではなく、「丁寧」を表す「お」であると考えられるであろう。

「伝えようとする丁寧さ」ゆえに、「丁寧を表す」という用法を持つのではないかと考える。よって、ここでの美化語は、「丁寧さを表す「お」の付く語」とする。

「おかし」の「お」は、「美化語」に属すると考え、「美化語」の機能により、話し手が美しく言おうとする丁寧だと仮定する。「私のかし」は、「お」を付けて「私のおかし」と言えないのであろうか。「先生のかし」とは言えず、「かし」に「お」を付けて「先生のおかし」としか言えないのであろうか。次の4文で考える。

Aが	(Bに)	Cを	作る
[1] 先生が	(私に)	おかしを	<u>お作りになる。</u>
[2] 先生が	(先生に)	おかしを	<u>お作りになる。</u>
[3] 私が	(先生に)	おかしを	<u>お作りする。</u>
[4] 私が	(私に)	おかしを	<u>作る。</u>

[1] 話し手から「先生」に対する敬意を表すため、先生の行為を「お～になる」という尊敬語を使用する。この「作る」という行為によって、影響を及ぼされる人は、「私に向けてつくる」の「私」すなわち、話し手自身の「私」である。

では、「お」を取った「かし」ではあてはまるのであろうか。

「先生が (私に) かしを お作りになる。」

敬意を表す「先生」によって「作る」行為によって作られた「かし」は、やはり「お」ついた形の「おかし」のほうがよい。

[2] 話し手が立てるべき相手である「先生」に、「作る」という行為をするのである。「作る」行為によって影響を及ぼされる人(「～に」で表される人)は、「先生」で、動作主と関与者は同一人物となる。

「おかし」は、「お」を付けずに表す「かし」で言えるのであろうか。

「先生が (先生に) かしを お作りになる。」?

敬意を表す「先生」によって「作る」行為によって作られた「かし」は、この「作る」という行為の影響を及ぼす相手が敬意を表す相手「先生」であっても、「かし」と言うよりは、「おかし」のほうがよいであろう。

[3] この「作る」行為によって作られた「おかし」は、「先生」へ向けられた行為である。よって影響を及ぼされる人（「～に」で表される人）は、「先生」となる。「お～する」という謙讓表現で低められるのは、動作主である「私」で、影響を及ぼされる人とは、「おかし」の所有者となるであろう「先生」になる。

「おかし」の「お」をとって、「かし」としたら言えるのであろうか。

「私が (先生に) かしを お作りする。」?

動作主は、話し手自身を表す「私」で、「作る」という行為によって作られた「かし」は立てるべき「先生」へ向けられたものである。「かし」と言うよりは、「おかし」のほうがよいであろう。

[4] 動作主は、話し手自身「私」である。話し手が動作主である「私」(話し手自身)の行為を「作る」としている。この「作る」行為によって、作られる物は、「私」に向けられた「おかし」である。「おかし」は話し手自身のための「おかし」である。話し手である「私」の「作る」という行為は、話し手自身に影響を及ぼされる。つまり、この文では、敬意を表す対象者は、存在しない。

では敬意を表す「お」であるのに、話し手自身の「かし」に「お」を付けて「おかし」とできるのはなぜであろうか。「おかし」の「お」を取った形である、「かし」がいえるのかどうか。「私のかし」でこの文を言い換えてみる。

「私が (私に) かしを 作る。」

「作る」という行為によって、影響を及ぼされる人は、話し手自身の「私」である。違和感は生じないが、丁寧さには欠けるような文となっている。

前述の「敬意を表す「お」」が「敬意を表す」意だけを持つという仮定するのであれば、ここでは「お」を付けにくいという結果になる。しかし、「お」をつけた「おかし」でもいうことができると④で判断しているため、「敬意を表す「お」」というだけではなさそうだ。

敬意を表さない人である話し手自身の行為によって影響を及ぼされる人が、話し手自身であっても、「お」の付く形の「おかし」といえるであろう。また「おかし」は、「おかし」のように所有者が明確でない側面を持つ。それは「おかし」の性質によるもので、「おかし」を他人に分け与えることが可能であるためかと考えられる。よってここでは、「おかし」に関する人を、関与者とする。

①から④を整理してみると、以下のようになる。

[1] Aは話し手が敬意を表す(立てるべき)人

- Bの関与者は敬意を表さなくてもよい(立てる必要のない)人(話し手自身)
行為者は、「お～になる」の尊敬語であるため敬意を表す人
- [2] Aは話し手が敬意を表す(立てるべき)人
Bの関与者は敬意を表す(立てるべき)人
行為者は、「お～になる」の尊敬語であるため敬意を表す人
- [3] Aは話し手が敬意を表さなくてもよい(立てる必要のない)人(話し手自身)
Bの関与者は敬意を表す(立てるべき)人
行為者は、「お～する」の謙譲語であるため話し手
- [4] Aは話し手が敬意を表さなくてもよい(立てる必要のない)人(話し手自身)
Bの関与者は敬意を表さなくてもよい(立てる必要のない)人(話し手自身)
行為者は普通体であるため話し手

[2][3]は、敬意を表す人のものに「お」を付ける。しかしここでは、[敬意を表す「お」]と異なり、[1][4]のように、話し手のものや、話し手のものになるであろうものにも、「お」を付けることができる。そのため、「丁寧を表す「お」]とする。

2-3 用法による検証 名詞化した「お」の付く語

3つめとして、「お」を付けた形で語として成立している、「おやつ」、「おにぎり」などの取り外すことのできない「お」を取り上げる。

取り外すことができないということから、日常的に、「お」を付けて言わないと意味の通らない、その語を言い表すことができないということである。

例えば、「おやつ」は、「お」をとると、「やつ」になり、「おやつ」を意味しないということになる。この「おやつ」の「お」は、取り外すことのできない「お」であり、[名詞化した「お」の付く語]と考える。

以下に、実際に使用された例を挙げる。

和一は言い、フィルターぎりぎりまで喫ってしまわないよう心掛けていた煙草を、水をはったバケツの灰皿に捨てた。ポケットの小銭を探り、自動販売機の前に立つ。

「まったく。こんなかにあるものでまともなものは、お茶だけだな」

『号泣する準備はできていた』(江國香織 2005 新潮文庫)

和一という男性が、普通体で発話している。この場合において、「お茶」という語を使用している。「茶だけだな」とは言わず、「お茶だけだな」と言うほうが自然であると考えられる。

「お」をとりはずすことのできない語を、[名詞化した「お」の付く語]とした。ここにあげた「おやつ」「お茶」をはじめ、「おじさん」「おばあさん」「お邪魔」「お医者さん」「おかげ」「おなか」「お辞儀」などがあげられよう。これらはすべて、「お」をとりはずして言うことの少ない、「お」を付けたほうが一般的な語である。

今後の課題

接頭辞「お」の付く語を、[敬意の「お」]、[丁寧の「お」]、[名詞化した「お」]という3分類をした。[名詞化した「お」]は、文法の問題からは外れるため、現場において、「名詞化」という意識なしに、「お」の付いた全体でひとつの名詞として導入してもよいかと考えられる。

[敬意の「お」]と[丁寧の「お」]は、区別することによって、自分のものに「お」を付けてよいかどうか判断できるようになる。例えば、「おかばん」の「お」は、[敬意の「お」]であるため、「自分の「かばん」には「お」を付けられないということがわかる。

また、「おかし」の「お」は、[丁寧の「お」]であるため、自分に関するものにも「お」を付けるという判断が学習者にできるであろう。

前述における「先生のおかばんをお持ちします。」の謙讓表現中の「おかばん」は、「謙讓表現中の尊敬語」ではなく、[敬意の「お」]であるというように、「お」に意味があるという説明のほうが、学習者に理解しやすいのではないだろうか。

本稿では、これらの分類が有効であるかどうかの分析までは至らなかった。このさきは、これらの分類が実際に有効であるかを検証するため、日本語教材などで接頭辞「お」の付く語を採取し、それらを分類別に考察する。

尊敬語、謙讓語、美化語などの5分類というよりはむしろ、話し手から聞き手または第三者に「敬意と表現する」ことによって、話し手の思いを伝えるということに焦点をあてて、今後も研究に取りくんでいきたい。

参考文献

- | | | | |
|-------------------------------|------|---------------|-------------|
| 菊地康人 | 1997 | 『敬語』 | 講談社学術文庫 |
| 国立国語研究所(甲斐睦郎) | 1984 | | |
| 『国立国語研究所報告78 日本語教育のための基本語彙調査』 | | | 秀英出版 |
| スリーエーネットワーク | 2005 | 『みんなの日本語』 | スリーエーネットワーク |
| 東中川かほる・東雲裕子 | 2003 | 『独りで学べる日本語文法』 | 凡人社 |
| 文化審議会国語分科会 | 2007 | 『敬語の指針』 | 文化庁 |

(研究紀要編集部は、編集発行規程第5条に基づき、本原稿の査読を論文審査委員会に依頼し、本原稿を本誌に掲載可とする判定を受理する。2009年9月24日付)。